

「文理融合の実質」と哲学の位置——「体育学」の事例から考える——

林 洋輔¹

1. 体育学とは——その基本的特徴と学問的独自性

- 1950年創立²
- 会員数 6,095名 (2016年3月31日現在、2015年度事業報告による)
- 14専門領域³

体育学は、身体練習による人間の身体的形成の原理と法則とを研究し、健康の増進、身体的発達の助成をし、身体活動ならびに、それに関係する経験を通して、望ましい社会性を育成し、生活を豊かにするための科学である⁴。

人間の身体運動に対してあらゆる可能な側面から総合的にアプローチし、そこから得られた知見を、各個人の生涯にわたる福祉の実現のために利用することである。われわれは体育・スポーツの個々の事象を科学的に究明し、少しでも多くの有効な知識を蓄積して、一般の人人の利用に供するよう努力することが重要であるといえよう⁵。

¹ 大阪教育大学教育学部保健体育講座 qqfs3s79@bridge.ocn.ne.jp

² ただし、戦前にも体育学に類する研究は行われていた。一例として1924年から1941年まで設立されていた国立の体育研究所が挙げられる。樋口聡 『身体教育の思想』 勁草書房、2005年参照。現在確認される場所では、体育学のいわば起源は1889年に博聞社から発行された毛利徳太郎・神保濤次郎 『體育学』が研究者によって指摘されている。(社)日本体育学会監修 『最新 スポーツ科学事典』 平凡社、2006年、574頁。また岸野雄三監修 『近代体育文献集成 第二巻 総論II』 日本図書センター、1982年、1頁以下参考。

³ 2017年現在は以下の14の専門領域から日本体育学会が形成されている。「体育哲学」「体育史」「体育社会学」「体育心理学」「運動生理学」「バイオメカニクス」「体育経営管理」「発育発達」「測定評価」「体育方法」「体育科教育学」「「スポーツ人類学」「アダプテッド・スポーツ科学(障がい者スポーツ科学)」および「介護福祉・健康づくり」。

⁴ 前川峯雄 『体育学原論』 中山書店、1958年、28頁。

⁵ 石川旦 「体育・スポーツの学問的研究の分野」『現代体育・スポーツ体系 第1巻 現代体育・スポーツ総論』 浅見俊雄他編、講談社、1984年、140頁。

体育学における諸分野の活動を総括するに、体育学は「身体運動する人間の
最高度の可能性を構想し、その実現を試みる学問」と再定義できる⁶。

●医学との違い

医術は技術であるとともに仁術（じんじゅつ）である。（…）元来医学の使
命は病気を治すことではなく病人を治すことである⁷。

「はじめに病人があった」のであって、その病んだ人々の手助けこそ医学の
アルファでありオメガであることに医学に志す者はいつも思いを潜めなければ
ならないのである⁸。

2. 学問としての全体像——デカルトにおける『学問の樹』を通じて⁹

- ①**実際の学問**——「現場」への応用可能性が「研究成果」の吟味基準
- ②**他者への貢献**——社会科学としての体育学
- ③**知恵の探求**——「真理」ではない？

「哲学」ということばは知恵の研究を意味し、知恵とは単に日常生活の分別
のことだけではなく、自分の生活を導くためにも、健康の保持やあらゆる技術

⁶ 林 洋輔 「総合人間学としての「体育学」」『大学体育』第108号（43巻2号）、2016年、75頁。

⁷ 澤潟久敬 おもだかひさゆき 『医学概論』 誠信書房、1960年、15頁。なお澤潟の医学概論については次の書籍が詳しい。杉岡良彦 『哲学としての医学概論：方法論・人間観・スピリチュアリティ』 春秋社、2014年。

⁸ 川喜田愛郎 『医学概論』 筑摩書房<ちくま学芸文庫>、2012年、19頁。

⁹ 体育学を特徴づける以下の三つの原理的特性は次の論文に拠る。林 洋輔 「体育学の全体像および独自性の解明：ルネ・デカルトにおける「学問の樹」を手がかりとして」『体育学研究』第60巻第1号、2015年、117-136頁。

のためにも、人が知りうるあらゆることがらについての完全な知識を指すこと¹⁰。

4. 体育学・学際協働における「哲学」の位置

1. 新しい「倫理」の構築

「新たな倫理」を築くことはできるでしょうか。人間によって錬成された道徳的諸規範、人間的諸社会のなかに流布された道徳的諸規範が、種の進化のなかに起源を有する共感の「社会的諸本能」を延長し、拡大すること、それをダーウィンとともに提案するような「新たな倫理」を築くことは¹¹。

2. 体育学の若手・研究者による「共同研究」

- ①同期現象¹²
- ②「身心統合のスポーツサイエンス¹³」から

3. 「プロトレプティコス Protreptikos」の再担当

プラトン『エウテュデモス¹⁴』

¹⁰ ルネ・デカルト、前掲書、12頁。

¹¹ ジャン＝ピエール・シャンジュール、ポール・リクール 『脳と心』 合田正人、三浦直希訳、みすず書房、2008年。

¹² 三浦哲都・林 洋輔 「動きにひそむ同期現象を探る—自然科学と哲学の協奏—」『体育の科学』第66巻第10号、2016年、738-742頁。

¹³ 征矢英昭・坂入洋右編著 『たくましい心とかしこい体—身心統合のスポーツサイエンス』大修館書店、2016年。

¹⁴ プラトン 『プラトン全集 8』 藤澤令夫編、岩波書店、2005年。

アリストテレス『哲学のすすめ¹⁵』

キケロ『ホルテンシウス¹⁶』

セネカ『倫理書簡集¹⁷』

哲学は民衆におもねる技巧ではない。ひけらかしのために考案された技巧ではない。それは言葉ではなく事実のうちに存する¹⁸。(…)それは魂を形作り、組み上げ、人生を案配し、行動の指針を示し、なすべきことと捨て置くべきことを教え、舵の前に座を占めて危険な潮流を切り抜ける針路を定める。哲学がなければ、誰も不安や心配なく生きることはできない。一時間ごとにも出来る無数の事柄が思慮を求めるとき、それは哲学に求めねばならない¹⁹。

デカルト『哲学原理²⁰』(仏訳序文)

5. まとめにかえて——「オーガナイザー」と「嚮導」の役割に向けて

¹⁵ アリストテレス 『アリストテレス 哲学のすすめ』 廣川洋一訳、講談社<学術文庫>、2011年。

¹⁶ キケロ 『ホルテンシウス 断片訳と構成案』 廣川洋一訳、2016年。

¹⁷ ルキウス・アンナエウス・セネカ 『セネカ哲学全集 5 倫理書簡集 I』 高橋宏幸訳、岩波書店、2005年。

¹⁸ セネカのこの言及について言えば、哲学とは論ずることではなく人間の行動のうちにその結実を見出すと解釈したい。論拠としてはルキウス・アンネウス・セネカ、同書、76頁の以下の記述を参考。「哲学が教えるのは行為であって言辞ではなく、〔哲学が〕求めるのは、各人が自身の掟に即して生きること、言動にも背かず、自己矛盾もない生き方をすること、すべての行動に一貫した様式があることだ。地われわれがなすべき最大の義務、知恵を示す最大の証左は何か。それは言葉と行為の協調、いかなる場合も自分自身と寸分違わず、変わらないことだ」。この直後に語られる彼の記述——「君の生き方の物差しを一つだけつかみ、君の人生のどこもその基準からはずれぬようにしたまえ」——は哲学が人間に「生き方」を教示する役割をなしたことの端的な証明と考えられる。William Jordan, *Ancient Concepts of Philosophy*. London: Routledge, 2004, p.151ff.において指摘されているように、セネカを含めたストアの哲学者は一方で「偉大な体系構築者たち the great system-builders」であるが、Arnold I. Davidson, *Preface*, in Pierre Hadot, *Philosophy as a Way of Life*. Oxford: Blackwell, 1995, p.23.にて指摘されるように実践知としての「生の技法 Art of living」にも知悉していたと言える。

¹⁹ ルキウス・アンネウス・セネカ 同書、2005年、61頁。

²⁰ ルネ・デカルト、前掲書、2009年。